令和6年度

藍住北小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

〇教員一人一人の授業力アップを目指し、個人差に対応した指導方法の工夫
〇「主体的・対話的で深い学び」のための教材・教具として、ICTを活用した授業実践について

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員　校長・総括　後藤　成人 教頭・総括補佐　村上　功洋 教務主任　友成　幸恵　　特別支援担当　高畠　裕子 1学年主任　玉井　明子　2学年主任　河野　明穂 3学年主任　青木　優子　5学年主任　横山　宏枝 6学年主任　藤本　由香里
野崎　真紀	

校長

後藤　成人

◎次の（１）～（３）をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

【各校の取組状況の把握について】

各学年で話し合いの機会をもつようにするとともに、知識・技能の習得については学期ごとに確認テストを実施する。
研究授業の際には、本校の課題となる点について話し合うようにする。

（１）知識・技能の習得

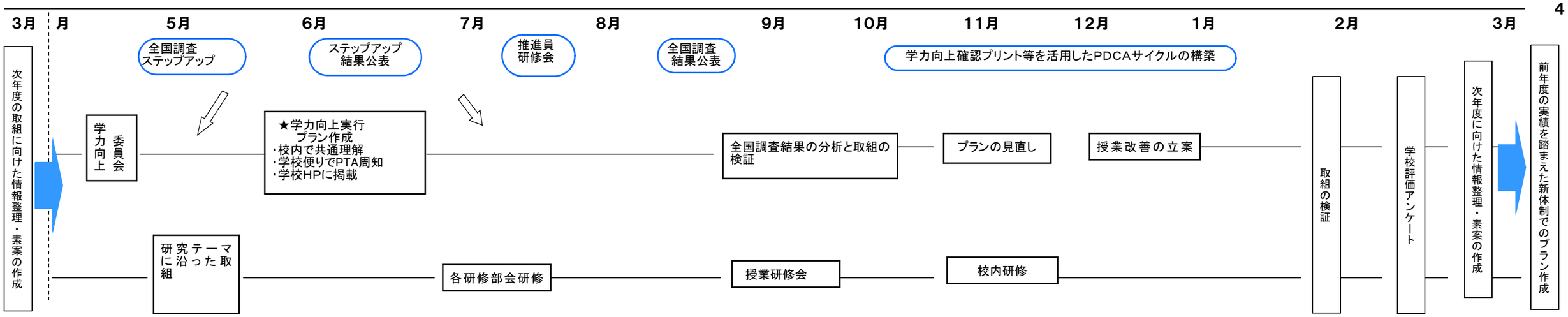
児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇「学びタイム」等での継続的な取り組みで、漢字の読み書きや四則計算などについては、ある程度の定着が見られる。 〇課題に対して真面目に取り組む児童が多い。 ●全体的に基礎・基本の定着は向上しつつあるが、個人差が大きい。語彙数が少なく、文章を書く力にも大きな差がある。正しい内容を聞き取ったり、読み取ったりすることが苦手な児童が多い。	①当該学年での基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けることができる。 ②語彙数を増やし、日常生活で、自分の考えや思いを言葉を選んで話したり、分かりやすく文章を書いたりできる。 ③これまでに学習してきた内容を他の教科に生かすことができる。	①「学びタイム」を計画的に行い、基礎的・基本的な学習の定着を図る。 ②ノートやワークをチェックする機会を定期的に設けるとともに、ノートの模範を掲示する。 ③スピーチや日記、メモをとる等で話す・聞く・書く活動の機会をとる。 ④低・中学年では少人数担当教員や支援員がT. Tにより児童のつまずきに対応する。 ⑤中学年以上は、授業交換や専科教員による専科指導を取り入れ、専門性を高めるとともに、児童の興味関心を高める。 ⑥5・6年生の算数科では習熟度別指導を取り入れ、得意な子にとっても苦手な子にとってもそれぞれの習熟度にあった学習環境を整え、力を伸ばす。	①確実に時間を確保し、集中して取り組めるようにする。 ③朝の会・帰りの会などでのスピーチでは、話す内容をメモする１分程度の長さにするなど発達段階に応じた目標をもたせる。 ④T. Tと連携し、児童のつまずきに対応できるようにする。 ⑥必要に応じて習熟度別指導を取り入れる。	①毎日継続して取り組むことで、基礎的な力が身についてきた。 ②定期的にノートやワークのチェックをすることで児童の理解度を把握し、個別に細かく指導することができた。 ③テーマを決めて日記を出したり、朝の会でスピーチしたりすることによって個人差はあるが、まとまった内容を話したり書いたりすることができるようになった。 ④T. Tによって、児童が安心して学習に取り組むことができ、一人ずつのつまずきに対応できた。 ⑤専科教員の指導を取り入れることにより、専門性の高い授業を行うことができた。 ⑥算数科の習熟度別指導を取り入れることで、児童に応じた学習を行い、つまずきに対応することができた。	①次年度も継続して取り組み、学年によっては応用問題に取り組む。また、タブレットの学習ドリル等を活用していく。 ③スピーチや日記等、話す・書く活動を積極的に取り入れ、自分の思いや考えを伝える意欲やスキルを高めていく。また話し方や聞き方についての掲示も校内で統一して作成する。 ⑤授業交換をした学級では、行事などで授業時数の確保が難しいことがあったので、年間を見通した計画が必要となってくる。 ⑥児童の習熟度に合わせたクラス編成に検討を図り、さらに充実した授業にすることが必要である。

（２）思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇自分の思いを他者に伝えたいという気持ちをもっている児童が多い。ペアやグループ学習では、積極的に自分の思いや考えを発言しやすく、意見の交流ができている。 ●目的や条件に応じて、文章を書いたり要約したりすることや、聞き取ったり話したりする力に課題がある。授業中に発言する児童に偏りがある。また、自分の思いを伝える語彙が少なかったり、自分の考えを分かりやすく発表したりするのが苦手であるため、十分に伝えきれないことがある。	①場に応じた話し方や声の大きさで自分の考えを進んで話すことができる。 ②相手の話を聞き、自分の考えと比べたり似ているところを見つけたりしながら聞くことができる。 ③自分の考えをまとめ、相手に伝わるように根拠をもって説明することができる。	①授業の中で、自分の思いや考えを説明する場面を意図的、計画的に設ける。 ②ペア・グループ活動や話し合い活動を積極的に取り入れ、自分の言葉で考えや思いを伝える場を設定する。 ③ICTを活用し、聞き方や話し方の例を示したり、注目すべき点を確認したりする。 ④ICTや思考ツールを活用し、考える力を育てる指導を工夫する。 ⑤メンター制や校内研修を活用し、経験の浅い教員の指導力を伸ばしていく。	①聞き方や話し方が身につくように継続して指導するとともに、良い聞き方や話し方ができている児童を紹介する。 ②ペア・グループ活動を積極的に取り入れることや、発言する児童が固定しないように配慮する。 ④イメージマップや思考ツールなども活用しながら自分の考えをまとめ、ノートやタブレットなどに表現し発表する場を設定する。	①話す場面を設けることによって、積極的に取り組む児童が増え、聞き方や話し方の基礎的な力がついてきたが、個人差が大きい。 ②ペアやグループでの話し合い活動を積極的に取り入れたことにより、自分の考えを伝えるだけではなく、他者の考えを取り入れようとする児童も見られた。 ③高学年では、ICTを有効活用し、意見をタブレット上で交換し合うことができた。 ④ICTの活用により、注目すべき点が確認できたが、思考ツールの活用までは十分にできていない。 ⑤若手教員とともに、教材研究にあたる時間をもつことができた。	①自分の考えが言いやすい雰囲気づくりに努めることや、ICTやホワイトボードなどを活用しながら、発表が苦手な児童には、まず書かせるなどの手立てを工夫する。 ②学習内容に応じて、ペアやグループでの活動を実施していくとともに、タブレットの発表ツールを活用して、様々な考え方を可視化できるようにする。 ③教師が授業においてICTを効果的に活用させるために、適宜研修等の機会を設ける。 ④発達段階に応じて、どのような場面で思考ツールを活用すべきか検討していく。 ⑤内容については、教職員の意見を取り入れながら、全教職員が主体的に研修に関わることができるようにする。

（３）主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇学習の初めの準備やチャイム着席などは定着してきている学年が多い。新しく学ぶことに興味をもって意欲的に取り組むことができる。 ●自分から進んで課題を見つけて取り組むことや見通しをもって取り組むことが苦手である。少し難易度が上がると、諦めてしまいがちになったり集中が続かなくなったりする傾向がある。 ●家庭での読書時間が少ない児童も多い。	①次時の学習準備やチャイム着席など、学習に取りかかる基本姿勢が定着している。 ②読書や家庭学習に進んで取り組んでいる。 ③自分から進んで楽しみながら学習に取り組もうとする態度を身に付けている。 ④苦手なことに対して諦めずに粘り強くやり抜くことができる。	①授業準備や机上整理をすませ、チャイムと同時にスムーズに授業を開始できるようにSWPBSを用いて児童の主体性を高め、できている児童を称賛し授業に取り組む態度を学校全体で定着させる。 ②朝の読書、週末の家族読書、教師やPTAによる読み聞かせ等で読書の時間の充実を図る。 ③ICTを活用し、興味関心をもたせ、課題解決のみならず、問題を発見できる力がつくよう意欲を高める。 ④できたことを肯定的に評価し、意欲を高めるとともに、家庭学習の取り組み方を具体的に示し手本となる事例を子どもや家庭に知らせる。	①取り組む内容を教室に掲示し、学級で目標を決め、自分から進んで取り組めるよう声かけや称賛をしていく。 ②学習したことに関連する本の紹介をすることで、読書の範囲を広げる。 ③児童も ICT を活用し学習をまとめたり発表したりする機会を設ける。	①ほとんどの児童が休み時間に主体的に授業準備をすませ、チャイムと同時に授業が開始できている。 ②毎朝、どの学年も進んで読書に取り組むことができているが、高学年になるにつれ学年にあった本を読めていない児童が見られる。 ③ ICT を活用することで、興味関心をもつ児童が多くいるが、学級間で使用頻度に差が出たり、問題を自ら見つけて解決しようとするような場面はあまりなかった。 ④個人懇談や家庭訪問、学年便り等で家庭学習について知らせる機会をもってきた。ま	①SWPBSで取り組んできた机上整理や授業準備、チャイム着席等全校での取組を継続していく。 ②様々な種類の本に慣れ親しむことができるように声かけをしたり、PTAや教師による読み聞かせ等をしたりする。また、単元に関わる本を児童に紹介するなど並行読書もすすめる。 ③ICTは下学年からの積み重ねが重要となってくるので、学年で相談しながら使う必要がある。また持ち帰りも進めていく ④引き続き、個人懇談や学年だより等で知らせる機会をもつとともに、タブレットの

				た、教室に手本となる事例を掲示することや児童に紹介することや個別に声かけをすることにより、粘り強く課題に取り組む児童が増えてきた。	持ち帰りによる家庭学習の充実も進めていく。

令和6年度　学力向上ロードマップ